

一 日本小児科学会 小児科領域講習 (iii 1 単位) 一

札幌市小児科医会研究会のお知らせ

札幌市小児科医会

【学術部 31. 4. 17】

拝啓 諸先生には益々ご健勝のことと拝察申し上げます。

さて、5月研究会は下記のとおり開催することとなりましたので、ご多忙中とは存じますが、万障お繰り合わせの上、多数ご出席下さいますようご案内申し上げます。

敬具

記

日 時：2019年5月14日（火曜日） 午後6時30分－8時00分

場 所：札幌市医師会館 5階西ホール（中央区大通西19丁目 TEL611-4181）

座 長：KKR札幌医療センター 小児科・アレルギーリウマチセンター

センター長 小林 一郎 先生

演 題：「乳児股関節脱臼の早期診断・早期治療の大切さ」

～検診体制再構築への取り組み～

演 者：北海道大学大学院 医学研究院 整形外科学教室

講師 高橋 大介 先生

演者紹介；

- 2000年 北海道大学医学部医学科卒業
- 2000年 北海道大学整形外科入局
- 2001年 帯広厚生病院整形外科
- 2003年 クラーク病院整形外科
- 2007年 札幌逋信病院整形外科 医長
- 2008年 北海道大学病院整形外科 医員
- 2009年 学位取得(変形性関節症発症に関わる遺伝子解析研究(Arthritis Rheum 2009))
- 2010年 北海道大学大学院医学研究科 人工関節・再生医学講座 特任助教
- 2011年 北海道大学病院整形外科 助教
- 2017年 北海道大学病院整形外科 講師 現在に至る

【その他】

- ・ 新たな人工股関節ステム(VLIAN)を共同開発し、2018年11月に一般上市開始しました。
- ・ 2018年10月から日本小児整形外科学会健診委員会 北海道ブロックを担当しております。

日本人は世界的に見ても最も股関節のお皿が浅い(寛骨臼形成不全)人種で、それゆえ必然的に乳児股関節脱臼(以下、DDHとします。)の発症率が高くなっています。DDHは1970年代前半までは発症率が2~3%と非常に高率でしたが、石田らが提唱したコアラ抱っこなどの育児指導が普及したことで、その後の発症率が0.2~0.3%まで減少しました。しかし、発症率が低下した近年では、一般人(主に母親)がDDHを認識する機会が減り、適切な育児指導を受けていないために、不適切な抱き方などで出産後に股関節脱臼を生じてしまう児が散見されます。またDDH症例を診察したことがない若い健診の先生も多くなってきたため、処女歩行開始後の診断遅延例も年々増加傾向で全国的な問題となっております。

DDHは適切な時期(生後3~5か月)にリーメン・ビューゲル法による治療(以下、RB治療とします)を開始すれば約85%の症例で整復が得られます。一方で、生後6ヶ月以降になってしまうとRB治療での整復率は著しく低下し、2か月間にわたる長期入院による牽引治療や手術治療が必要となってしまいます。また、整復時期が遅れると幼少期に股関節が發育不良となり、将来的に寛骨臼形成不全や変形性股関節症となる可能性が高くなってしまいます。そのためDDHは早期発見・早期治療が非常に重要な疾患と考えられています。

DDHの予防法のひとつである「コアラ抱っこ」を広めるため、札幌市保健所のご協力のものと、育児書へDDHに関する記事の掲載や新生児訪問時の育児指導を強化していただいたことにより、徐々に一般認識率は改善してきております。また、日本整形外科学会・日本小児整形外科学会では一次健診の精度向上を目的として乳児健診における二次検診への紹介基準(以下、「推奨項目」とします)を作成し、2015年12月から全国の健診で使用開始を促してきました。さらに、日本小児整形外科学会は2018年から健診委員会を立ち上げ、予防運動を推進しております。

幼少期に股関節に障害を持ってしまうと、その子は一生その障害と向き合って生きていかなければなりません。我々は、ひとりでも多くのDDHの子供の股関節を救いたく、様々な角度から予防・治療に取り組んでおります。今回与えていただいた貴重な機会にこのようなお話をさせて頂きたいと思っております。

次回の予定

日時：2019年6月15日(土) 17:00 開始 場所：札幌市医師会館5階大ホール
演題：「安全から組織の質管理へ」 (専門医共通講習・医療安全-1単位)
演者：藤田医科大学病院 医療の質・安全対策部 医療の質管理室 安田あゆ子先生